

たかが川柳されど川柳（十四）

上野 一彦

人のふり見て安心す

同じ後期高齢者の仲間入りをした親しい友人と話をしていた。会話の中でよく知っているはずの共通の人の名を彼が言おうとして出てこないことがあった。「○○さんのことですか」と名を出すと、「そうそう、その○○さん。この頃、人の名前が出てきにくくなって・・・」。自分も頓にそう感じる人が多いので、私より多少は若い彼の言葉に妙に仲間意識を感じた。

「ものの名前が出てこない、置き忘れが多くなるなど、忘れっぽくなった。」「何度も同じことを言ったり聞いたりするようになった。」「料理・片付け・計算などのミスが多くなった。」「テレビ番組の内容が理解できな

くなった。」「以前はあった関心や興味が失われ、何をすることも億劫になった。」「表情が暗くなった。」「怒りっぽくなり、不満ばかり口にしたり、手を上げるようになった。」「外出時に慣れた道で迷ったり、分からなくなったりする。」

まさにシルバー川柳の句想ネタのようでもあるが、実は「認知症早期発見チェック項目」なのである。だからなんだといわれそうだが、確実にこれらの項目が当てはまるようになりつつある気がする。気がするではなくて、その通りよと家内の声が耳に木霊する。

古物商売りに出すならまず亭主（和）

認知症と老化の相違はなんなのだろうか。一気に来る

のと徐々に来るのとのちがいか、本人の自覚の有無の差なのか。一度医者に詳しく聞いてみようと思う。いづれにしても大切なのは気力の差のような気がする。足腰同様、年々気力は衰えてくる。それだけに穏やかといえは聞こえはいいが、幸福感の源の一つは満足感ではないだろうか。

これがまあきつとそうかな認知症（和）

ふと、最期は認知症を併発して亡くなった両親のことを思い出し、自分がそうした状態に移行する瞬間を思い浮かべる。おそらく自覚症状はないのではないかと思うし、最初はまだら状態なのかもと推測する。そうしたある日、早めの夕食をダイエットを心がけ軽くとってソファで家内とTVを見ていた。ついウトウトとし、目覚めた瞬間「夕食はどうするの」と口走ってしまった。家内は目を丸くし「あなた！とうとう始まったの」と言わしげに絶句した。

十分に生きたといつて今日も寝る（和）

そして、一日一日が珠玉のような時間。歳と共にいろいろな縁で人は結ばれていることを知るだけでなく、そんな人との邂逅が限りなくとおしい。一日の活動を終え、ゼンマイの切れた人形のように床に就くときなんと

なく満足感がある。健康寿命を保ちつつもう少しこの余韻を楽しみたい。そんなときつい頭をよぎるのが、『今日もいい日だったなあ』。

毎日が一期一会となつていく（和）

一期一会、良い言葉である。もともと茶道の心得を表した言葉とか。茶会では一生に一度のものとして、主客ともに誠意を尽くすべきことをいうそうだ。まさに感謝の一日である。それこそ一瞬一瞬が限りなくとおしい。感謝しつつ、残された時間を心穏やかに有為に過ごしたい。

賞味期限私自身がもう切れる（和）

ボケ防止というわけではないが人並みにパソコンなどできるだけ使うようにしている。変換ミスも何のその、これも修行とブライントタッチは無理にしても慣れない速度で日々扱うが、頻繁なバージョンアップの表示は実に迷惑。詐欺商法のように新しいアプリの広告が目飛び込む。ちよつと興味をもつて進行させても、だいたいは途中での入力ミスやパスワードが思い出せずに頓挫する。

日々、シルバー川柳特有の一見枯れた句が多くなってくるのは事実なのだが、そんな弱気な自分を叱咤激励し、

昨年暮れに作った意欲作が次の一句である。

煩惱が減ってきました百七つ (和)

まだまだ残る煩惱がたくさんあります。除夜の鐘をききながら、もう一年、もう一年と齡を重ねることが人生そして、老いを笑い飛ばすようなシルバー川柳を読み続けることも大切だと思っっている。除夜の二〇八つの鐘を聴きながら、まだまだ残りの万能的なで生きようと思っう。

相変わらず乱読癖は直らないが、最近ますます記憶の想起がスムーズでなくなってきた。読み散らかす癖は結局、記憶そのものを攪拌してしまう。それでもノートの片隅にかすかな記憶のメモが残っていた。泉鏡花の「愛と婚姻」の一節である。

妻なければ楽少く、妻ある身には悲多し

嘔み締めるべき言葉である。川柳の中にはカミさんを出汁にしたものは結構多い。決してのろけというわけではなく、恐妻家ほどそうした傾向がみられるようだ。そうした句想の源泉にただただ感謝である。過ぎ越し方を振り返り、カミさん三題。

カミさんに感謝言ったら勘ぐられ (和)

カミさんの無口になぜか動揺し (和)

カミさんは俺の急所を知っている (和)

夫婦喧嘩は犬も食わぬということわざと共に、たまの軽い軋轢もすぐに修復。仲直りにも年季が入ってきている。なんといつても朝、何事もなかったように「おはよう！」。そして心の中ではホツとしながらわだかまりなくまた一日が始まる。男たるもの余計なことは言わぬが花。わかつてはいてもたまに、いや多弁な私はしよつちゅう失敗する。

言い訳が二度目の嵐呼びました (和)

反省、反省。もう失敗は許されない年齢。生まれ変わったらまた一緒にやろうやなどという言葉が臆面もなく出てくる。友人の中には、せっかくのチャンス。今度は別の恋にチャレンジするのが当たり前なんというたくましい輩もいる。どれが本音かわからぬが、どうせまた同じことの繰り返しではないのかなとうそぶきつつも、そんな夢もそつと見てもよいかなと思わぬでもない。

まな板の音で目覚める果報者 (和)

二度寝を決め込む朝床の中で、こんな心境になることがある。結婚したての頃はこんな句が生まれることは容易に想像できる。何十年も経つうちに主客逆転。実は台所をしているのは自分だったりして。とするとこれは願

望に近い句なのだろうか。とどのつまり、「主夫と生活」こそ、今は私にとって究極の生きがいなのかもしれない。こうして川柳精進の道は、行きつ戻りつ、そして紆余曲折しながらもどこまでも続いていくのである。

昭和史を学ぶ―「満州国演義」によせて―

一年年ほど前、親しい友人から船戸与一の「満州国演義」という長編を読んでいるという話を聞いた。いまだ長編小説なんてと思いつつも、自分の育った昭和の影が薄くなるにつれ、自分のルーツに対する郷愁が深まった。本の背景となる昭和近代史はまさに自分の親や自身自身が育った時代なのである。昭和史そのものは意外と少なく、同時に社会科の日本史でも明治維新くらいまで現代に続く近代史はあまり教えられてもこなかった（中国や韓国などのように為政者によって作られ、教え込まれるよりはむしろたかもしれないが）。

自分たちの青春時代はいわゆる安保闘争の時代でもあったわけで、その洗礼を否応なく受けてきた。当時の若者にありがちな左翼思想は定番であり、習うものよりはわが身で感じるものであったのかもしれない。書ではなく、まさに街に出でよであった。

新元号になった今、自分のルーツをもう一度見つめ直す意味でもこの読書は大いに意味があったと思う。

さて小説は、敷島四兄弟と間垣徳三という舞台回しによって展開されるのだが、これらの登場人物は、それによって一つの人格のような気さえする。小説ではあるが、史実に実にリアリティに満ちている。

最終9巻のあとがきに、「書いては資料に戻るということを修行僧のように繰り返した」とある。確かに我々が知る歴史はどこか不完全で、作られたものであることが多いが、それでも、その流れのなかで我々の両親が生き、われわれが生まれ、生きてきたという歴史の実感はずいぶん多い。

多くを語り尽くすことはできないが、小説の中で体験する戦争は、歴史という大きな歯車の中で必然であったかのような錯覚に陥ることがある。我々はその悠久の河の流れに浮かぶ、はかない木の葉の一片なのである。

だからこそ、戦争の体験を語り継ぐとき、それは為政者が語るがごとき、必然、最善の手段だったのでは決してなかったという疑問も伝えておきたい。一人間が、一家族が、好むと好まざると戦争という過酷な悲劇への道へ巻き込まれていくとき、可能な限り、その一步一步を

踏み出す瞬間に、マスクミなどに踊らされず、自分自身で判断できるものならしたいとひそかに心の中でつぶやくのである。

内村鑑三の言葉だったか、「真の教養とは、既存の知識に対してまずは疑いをもつこと」というのがあった気がする。小さな存在なりに、必死に自分で考え続けることが大切なのだと思う。ある意味で、戦争のなかった平成は評価されるべきであろう。戦争を賛美する馬鹿者ほどの時代にもいる。広島、長崎の原爆投下、そして唯一の被爆国でありながら、その原点さえ忘れてしまうお粗末な為政者もいる。第二次大戦後、東西の冷戦終結後も世界の歴史を振り返れば幼い子供たちを巻き込む内戦状態は、常に世界のどこかに存在し、絶えることがない。人類は相も変わらずこうした愚かさを繰り返している。

もう一度、日本の戦没者の六十%強の百四十万人は餓死であったことをしっかりと思い出すべきである。戦争を語り継ぐなどと偉そうにはたしかに言えないが、何がしかの痕跡をとどめてはおきたい。知らないことが新しいというのであれば、私は新しくはありたくないし、古い昭和生まれであることを誇りにさえ思う。まさに滅びゆく者のつぶやきかもしれないにしても。

その一部を紹介する。

「一九三三年（昭和八年）、『関東防空大演習を嗤（わら）う』という社説が掲載された。数日前に行われた陸軍の大規模な演習を論じたものだが、悠々は『敵機を関東の空に、帝都の空に、迎え撃つということは、我軍の敗北そのものである』と断言した。敵爆撃機は日本沿岸までで防がねばならず、本土に侵入を許せば東京は関東大震災と同様に焼け野原になると警告した。」

信濃毎日の反軍的な論調を常々快く思っていなかった軍関係者はこの機を逃さなかった。地元の在郷軍人会幹部が同社に乗り込み、不買運動を展開すると脅した。当時の信濃毎日の発行部数は約二万部。在郷軍人会は八万人を超えていたそう。結局、桐生悠々は新聞社を去らざるを得なかったという当時は伝えるNEWSである。

私の満州国ロスは続く。しばらくして、日本の近現代史の歴史学者にして東京大学教授である加藤陽子の「それでも、日本人は「戦争」を選んだ」を読んだ。高校生に語る近現代史である。私より二〇歳近く若い。高校生がどのような反応を示したか興味深く思った。

ところで、件の満州国演義。半年お付き合いたいだった同好の士は六人。何とか単行本全九冊を読破した、ある夏の夜、読後感想会が持たれた。人にはそれぞれ読み方がある。登場人物の精密な相関図を完成させるなどは大著を読む者の王道中の王道である。小説の展開を一つ一つ史実と確かめてみるとか、いろいろな読み方があることを知った楽しい夜だった。

「満州国演義」を語りつくした一夜から数か月経ったが、それぞれのころに満州国ロスというかその余波の続くことを知った。

私は、自分がその立場にあつたらどのような行動をとったのだろうか、とれたのだろうかという、命題がずっと心の中にあつた。最期の瞬間に、愛する家族のために自分を投げ出すことぐらいは出来そうな気はしても、それだつてその場にならなければわからない。

高校時代、人間として好感を抱いていたある教師が、「インテリはなし崩しの変化に弱いものだ」とつぶやいたことがずっと脳裏の片隅にある。彼自身の自嘲気味の独白だったのかもしれない。おそらくその流れだつたと思うが、戦時下にあつて最後までジャーナリスト魂を貫いた「信濃毎日新聞」の主筆、桐生悠々のことを知った。

その後、渡辺利夫の「放哉と山頭火―死を生きる」を徒然なるままに読んだが、無頼の俳人、尾崎放哉の生涯にも満州が色濃く反映していること知った。彼が流れ流れていった京城では、放哉の滞在中、「朝鮮における初の『知の殿堂』たる京城帝国大学が建設されていた」という記述があつた。大阪帝国大学や名古屋帝国大学の建設に先んじての壮図であつたそう。京城は現在のソウル特別市。今日の日韓の関係を思うとここにも歴史の流れを感じる。かの地で放哉は結核で満鉄病院に入院するのだが、どこまでいっても満州は私を放してくれそうもない。

たかが川柳 されど川柳 (二〇一九年下半年)
 (川柳同人「多年草」(毎月)、川柳同人「ばらばらⅡ」(隔月)に発表した拙句を解説付きで載せています。)

七月

ばらばらⅡ 1号(「だんだん」より改名)

道路でき村から人が消えていく

◇近代化の象徴は治水と道路整備。地方に立派な道路が

できると、いつの間にか若者がその地を去り、過疎が生まれる。

節約も大事な稼ぎ老財布

◇現役を引退しての年金生活。定期収入の減った今、無駄な浪費を避ける知恵こそが老後の稼ぎという皮肉。

気遅れを振り払いつつクラス会

◇同窓会、クラス会に集うのはどちらかといえばハッピーな人種。それでも懐かしさがこみ上げいささかの気後れを振り払いつつ参加する。

題詠「楽」

先ず楽を新入社員繋ぎとめ

◇近年、成田離婚やら、難関を突破しての入社直後の退職やら、若者の方向転換の速さが目立つ。会社側としては新人教育でも釣った魚にまた「馳走を用意する」。

巻き道と女坂のみ運び行く

◇山を歩いて、正面の険しい道より楽な迂回路、男坂と女坂があれば必ず女坂を選ぶ習性がしつかりと身についてきた。これ老いの知恵。

楽々とご飯三杯食べた頃

◇代謝が悪くなってきたせい、食事の量が減ってきた。食べ放題、飲み放題よりも、ちよっぴりおいしいものと

いう昨今、ご飯のお替わりが当たり前だった昔が懐かしい。

多年草119号

気がつけばシャッター通り脳の中

◇地方のみならず、近間の商店街でもシャッター通りは珍しくない。ふと、最近のこの激しい物忘れ、わが脳の中もこの通りかと想像するに難くない。

リモコンを握ったままで即身仏

◇テレビを見ながらついたたねすることが多くなった。家内から「あなたまるで即身仏のようだったわよ」そこで一句。

裏社会ひな壇芸人仕分けする

◇裏社会とのつながりで、芸人タレントがTV番組から即退場。仕分けは裏社会がしてくれるという構図。

題詠「零・ゼロ」

二世たちゼロからやってみてごらん

◇政治も、芸能界も親の七光ならぬ、二世たちが満ち溢れている。いったんゼロからやってみなと言いたくもなる。

情けなどいくら掛けてもゼロはゼロ

◇数学におけるゼロの発見は一大発見。ゼロをかけること

ゼロになることを知り、それを人生や子育てに当てはめてみる。

零戦をどう語り継ぐ令和の世

◇戦争を経験した親たちに育てられた昭和世代。その昭和世代に育てられた、戦争を知らない平成世代。その平成世代が育てる令和世代にとって、戦争の象徴でもあった零式戦闘機はどのように目に映るのだろうか。

八月

多年草120号

盗人のように日陰を渡りゆく

◇日差しが強い炎天下の夏の道路。少ない日陰を選び、渡り歩く姿はまるで盗人のような心地。

極秘婚それも手腕と見せつける

◇若き政治家、小泉進次郎。次期首相は私だといわんばかりの結婚の挨拶に行った官邸での記者会見。大型カッブルの極秘婚。それも手腕の一つなのか。

お・も・て・な・しついに大魚を釣り上げる

◇できちゃった婚で婿さんを釣り上げた「お・も・て・な・し」で一世を風靡した滝川クリステル。結構ですな。

題詠「痛い」

かみさんは俺の急所を知っている

◇何も言うことなし。そのとおーり。

時が経ち痛い思い出美酒となる

◇つらい思い出も時間の経過とともに醗酵し、その人にとって大切なものへと変化していく。それが人生。

そこだけは突いちゃいけぬと知りながら

◇お互いに弱点を知りながらついついそこを突いてしまふ。いけないと知りながらも、後で反省することわかっていてもそれ未熟さなのかな。

九月

ばらばらII 2号

天国も老人たちで満ち溢れ

◇世の中六〇歳以上が三分の一を占める時代。超高齢者時代の中で天国もまた高齢者時代を迎えつつあるのか。余計な心配。

ユニークは変わり者へのほめ言葉

◇まあ「ユニークです」はほめ言葉なのか皮肉なのか、確かに変わり者ですとはいいいく。あかちゃんになると、かわいいといえないと「元氣そうです」になる。

つきあいが面から点になっていく

◇歳と共に付き合いが減ってくる。面から線に、線から点に。だから大切にしなければという教訓。

題詠「独」

いつの間に独りのほうがよい寢床

◇片時も離れたくなかった二人なのに。いつの間にか別の床、別の部屋。それが自然の成り行きという人もいるけれど・・・

独り身の気楽さ無理に語る君

◇最初から独身のひとではなく、妻帯者が連れ合いを無くすという晩年。「かえって気楽でいいですよ」は、やっぱりやせ我慢。

気がつけば地獄で待つは俺独り

◇一緒に地獄に落ちるはずだったのに、気がつけば自分一人だけということになりはしないかという心配。あなたは大丈夫ですか。

多年草121号

拡散は核もスマホも命とり

◇核の拡散は人類の滅亡。スマホでの情報の拡散もこれ命とり。なんでも広がりますことはよくありません。

一〇月

多年草122号

原発の町にもいたよ越後屋が

◇越後屋の差し出す賂の金子の入った菓子箱に、悪代官が「おぬしも悪やのう」は時代劇のきめ台詞。まさか現代、原発の町で、金子の入った菓子箱のやり取りがあったとは驚き桃の木山椒の木。

タマネギの中はやっぱり腐ってた

◇韓国の「たまねぎ男」とは歴史のページ。結局一月持たずに退場。家族ぐるみの不正発覚。こんな時事川柳、額縁には入りません。

散歩道溢れる水は河の意地

◇河川にはグラウンドや散歩道がありますが、記録的な大雨になるとすべてが水没。川が川たる存在というか、意地を見せたような。

題詠「間」

隙間風たまには吹いて夫婦です

◇夫婦喧嘩は犬も食わぬとは言いますが、たまには多少の軋轢が。でもすぐに仲直り。それが自然な姿なんです。底板と菓子の間で泣く金貨

プレバトが唯一私の師匠です

◇テレビ番組「プレバト」。素人むけの辛口の俳句教室番組だが、川柳にとっても勉強になる。季語こそないが、情景が膨らむよい俳句は川柳として同じこと。

プレグジット自由求めるイバラ道

◇世界に蔓延する自国ファースト。英国のEU離脱、ブレグジット。進むも地獄、退くも地獄。大英帝国はどこに行くのか。

題詠「情け」

引きこもり濃すぎた愛のツケ払い

◇愛情たっぷり育てた結果が引きこもり。愛情のかけすぎだったのか、子育ては難しい。決して見返りを求めた愛ではなかったのだが。

愛情も味噌汁なみの濃さが合う

◇濃すぎず、薄すぎず。愛情も味噌汁の味減も。どこのつまりは似てますね。その丁度よさが老後の夫婦愛かな。

情報がダダ漏れしてるスマホです

◇わけのわからぬメールがあふれているスマホ。情報過多です。それは情報の洩れにもつながっているわけで、私たちその洪水の中でアップアップしています。

◇菓子箱の底に金貨を詰めるという古い手法がいまだにあったなんて本当に驚きです。人間の性は変わらないということでしょうか。

都合よい距離がわかって別れる

◇動物の世界には個体として本能的に安全を守る間隔を意味する「安全距離」という言葉があります。人の付き合いにもそれぞれ固有の距離感があり、それがわかってしまうとスリルが無くなってしまふのかもという深遠な句。

一二月

ばらばらII 3号

昭和びと被爆の歴史語り継ぐ

◇昭和生まれの私たちは、唯一の被爆国であるという歴史を語り継がなければならないと責務があると思うのですが。

おたがいに整理しされる終活よ

◇自分が整理する終活の中には、自分自身が整理されることもありうるという怖い教訓です。

ヒトも皆絶滅危惧種へと向かう

◇地球上には絶滅危惧種という言葉があります。おそら

くその速度を速めているのは人間自身なのですが、やがてわれら人間自身が絶滅危惧種になってしまうのではないかと話です。

題詠「渋谷」

ハチ公も迷子になるよ渋谷駅

◇渋谷の再開発はまるでアリの巢のような地下街があります。もしハチ公が現代にいたらきつと迷子になってしまうだろうな。

玉電の丸み懐かし停車場

◇あの緑の丸っこい玉電なんていう共通の思い出を持つ人々も少なくなってきました。あれこそが「The SIBUYA」。

人波を泳ぎ切れるかスクランブル

◇スクランブル交差点発祥の地、渋谷。あれこそが都会の人波の象徴。その波を泳ぎ切れるかが現代の人間模様

多年草123号

温暖化欲しい水陸両用車

◇大雨でたくさんの車が水没しました。ふとこんな時、水陸両用車が有ったらどんなに便利だろうかという発想からの一句。

支持率の調査電話を待つ私

◇ゆるみ切った一強の政治。それでも不思議なのは下がらない内閣支持率。いったいどんな調査が行われているのでしょうか。それにしても私のところにはそんな調査の電話掛かってきたことないな。

歯切れ良く中身無くてもセクシーね

◇小泉大臣の初入閣。外国でしゃれたことを言ったつもりかセクシーの一言で大顰蹙。案外見かけだけのいい格好しいだとすると幻滅。

題詠「点」

点数をかせぐ言葉に飽きがくる

◇言葉の軽い時代。点数稼ぎだけを頭に置いたスピーチを聞くといい加減いやになります。「真摯に反省します」「鋭意努力します」いい加減にしてほしい。

細やかな言葉ひとつで灯が点る

◇こころのこもった細やかな思いやりのひと言。胸の中にあたたかい灯が点ります。そんな家族、友達を持ちたいものです

足りませんいつも最後の一点が

◇なんでも点数化される世の中。そうした点数主義横行の中で最後の一点がどうしても足りないなんていくこと

があるような

一二月

多年草124号

教皇に核無き平和教えられ

◇ローマ法王が来日。広島、長崎を訪れ、核なき平和を説かれました。唯一の被爆国でありながら、核の拡散防止条約に加わらないわが政府、情けない気がします。

アフガンに命捧げし医師一人

◇アフガニスタンで水利事業や農業支援に心血を注いできた中村哲医師（七三歳）が車で移動中に銃撃され殺害された。そのことをどうしても忘れたくないための一句。川柳味はなく日記に書いておいてと言われそうだが。

またしても情報隠しワンチーム

◇今年の流行語大賞にも選ばれたワールド・ラグビーの言葉とは真逆の、「桜を見る会」での内閣府の情報隠しでみせた政治家と官僚の見事なワンチームぶり。

題詠「仮」

あの世でも仮面被って生き抜くぞ

◇この世だけでなくあの世でも仮面をかぶって生き抜かなくてはなんて。パーソナリティの語源はペルソナ（仮

面）とか。

仮の世と世からこそなおお練

◇この世は仮の世とは言うものの、この世しか知らない私にとってはやっぱりしがみつきますね、最後まで。

鉄面皮仮面剥がせば議員さん

◇永田町には恥を知らず、道義をわきまえぬ面の皮の厚い奴らが跋扈します。どうしてこんな世の中になっちゃったのでしょうか。それを選んだのは私たちだって？

(丁)